

平成16年度「学部と附属学校園の共同研究」音楽科部会の研究報告

〔研究メンバー〕 福井昭史（学部），松尾英治，森山浩一（小学校），福井千代（中学校），寺田弥寿子（幼稚園），川尻暁子，藤田美穂子（養護学校）

1 研究の概要

音楽科部会の研究初年にあたる平成16年度は，各学校で授業研究を実施することとし，指導にあたっての共通テーマとして「聴くこと」を設定した。

音楽科の評価の観点として重視されている「音楽的な感受と表現の工夫」を授業でどう指導し，児童生徒にその能力を身に付けさせるかが大きな課題であり，また，このことが音楽科指導のポイントであるともいわれている。

表現の質的な向上を目指すには，音楽表現の特質や美的価値を鋭敏に感じ取る感受性が必要であり，授業では音楽活動を通してその育成に努めなくてはならない。そのためには聴く力のメカニズムを究明し，学習活動におけるその現れ方を理解するとともに，その育成方法についても研究を深める必要がある。そこで，本年度の授業研究では，表現や鑑賞の活動における児童生徒の感受の実態を観察することに重点を置き，授業計画とその実践を行った。

2 研究の経過

研究にあたって，研究協議会と授業研究を実施した。

【研究協議会の記録】

	日 時	場 所	検 討 内 容
1	9月4日（土）	教育学部	研究テーマの検討，授業研究の計画（日程調整）
2	10月25日（月）	附属小学校	研究内容の共通理解，指導理論についての確認，その他
3	2月22日（火）	附属中学校	授業についての研究協議，研究結果の検討

授業研究は，附属4校園で次のように実施した。

【授業研究の記録】

	日 時	場 所	題 材	指導教諭
1	12月7日（火） 3・4校時	附属養護学校 音楽室	「合奏をしよう」 （練習曲「まほうのことば」）	藤田美穂子 松下幸美 田中昭二
2	12月10日（金） 10:45～11:30	附属幼稚園 ふじ組保育室	「ねらい」クラスの友達と一緒に歌を歌ったり話を聞き合ったりして，降園前のひと時を楽しむ。	寺田弥寿子
3	2月22日（火） 校時	附属小学校 音楽室	「みんなで合わせて表現しよう」 （「パレードホッポー」，「旧友」）	森山浩一
4	2月22日（火） 15:10～16:00	附属中学校 音楽室	「日本の伝統的な音楽を知ろう」 （世界に誇る日本の伝統的な音楽「雅楽」）	福井千代

各学校での授業研究の概要は次のとおりである。

3 附属校園での授業研究

(1) 附属養護学校

音楽科学習指導

平成16年12月7日(火) 3・4校時

小学部3組(全6名)

場所 附属養護学校 音楽室

指導者 CT 藤田 美穂子 ST 松下 幸美 ST 田中 昭二

- 1 単元名「合奏をしよう」
- 2 練習曲「まほうのことば」
- 3 指導計画

- (1) 担当する楽器を決め、リズムやメロディーを練習しよう・・・ 2時間
- (2) リズムやメロディーを意識して伴奏に合わせよう・・・・・・ 1/2時間(本時)
- (3) リズムやメロディーを意識して合奏しよう・・・・・・ 2時間

4 学習活動

- (1) 始まりの歌をうたう・・・ 「音楽のおくりもの」
- (2) 練習曲を手話をつけて歌う・・・リズムを感じながら歌ったり、踊ったりする。
- (3) リズム練習をする・・・ 身体表現(四分休符・四分休符・四分音符・四分音符)
- (4) 楽器で個人練習を行う・・・ 木琴, 小太鼓, ピアノ, タンバリンに分かれて練習
- (5) 伴奏に合わせて演奏する・・・楽器ごとに練習の成果を披露する。
- (6) クラスの歌「手と手と手と」を, 担当する楽器を用いて演奏をする。

5 児童の実態と目標

A・T (6年生)	・曲を聴いて, 自分でアレンジしてリズムをたたくことができる。 ・鍵盤に貼ったシールとシール楽譜を見て, メロディーを弾くことができる。
ピアノ	・伴奏に合わせて簡易メロディーやメロディーを弾くことができる。
K・I (6年生)	・簡単なリズムをたたくことができるが, リズムが速くなりがちである。 ・歌をうたうことが大好き。しかし音程は全く合わない。 (聴力に多少問題があるかもしれない)
小太鼓	・両手に持っているバチで, 交互にたたいてリズムをとることができる。
K・T (6年生)	・ゆっくりで単調なリズムをたたくことができる。 ・個人で演奏することを好み, みんなと一緒に演奏することは難しい。
木琴	・歌詞カードの色を見ながら, 木琴の2つの音をたたき分けようとする ことができる。
T・N (5年生)	・みんなの演奏を聴くのが好きである。 ・小太鼓などの楽器に触ることが好きである。
タンバリン	・みんなの演奏を聴いたり, タンバリン等に触って楽しむことができる。
N・A (5年生)	・楽器の持ち方やたたき方など, 自分でアレンジして演奏する。 ・簡単なリズムなら, ある程度たたくことができる。
木琴	・教師から指示された色の音を, 好きなリズムでたたくことができる。
M・H (5年生)	・教師や友達の模倣をして, ある程度正確にリズムをたたくことができる。 ・一人で演奏すると緊張して萎縮してしまう。みんなと一緒に楽しく演奏す

	ることが好きである。
木琴	・歌詞カードの色を見ながら、木琴の2つの音をリズムに合わせてたたくことができる。

<合奏活動について>

本時の授業は、「合奏」活動をすることを目的としていた。

本クラスの児童は、小学校学習指導要領の中学年の目標である、「旋律に重点を置いた活動」ができる子どもは1人、低学年の目標である、「リズムに重点を置いた活動」ができる子どもが5人、あと1人の子どもは、音楽を聴いて楽しむ、教師と一緒に演奏をして楽しむという実態である。

よって、授業のレベルとしては、「リズムに重点を置いた活動」を主として行っている。リズムを指導する際には、楽器を用いて直接音を出すことから始めるのは難しい。握り方や、音の強さなど、個人で実態が違うのである。

そこで、リズム感をつかむため、まずは歌を覚えながら手話付きのダンスをしてみたり、ボディパーカッションのように、体をたたいて拍子をとる練習を取り入れてみた。すると、手話ダンスをすることで曲に馴染めるようになり、ボディパーカッションをすることで、拍子をとることを楽しみながらできるということが分かった。

これからの課題は、ボディパーカッションでリズムがとれるようになってから、楽器に移ったときに、同じようにリズムがとれるようになることと、分奏から合奏になったときにも、同じくリズムがとれるようになることである。これらをクリアするためには、手指機能の問題、集中力の問題、周りの音が聴けるようになることなど、たくさんの課題がある。本校の児童・生徒の場合、「音を楽しむ」ということも重要視することが必要と思われるので、技能の向上とどう折り合いをつけながら活動していけるかが、教師にとっての目標である。

<児童について>

本時において、ある女子が小太鼓のスティックで友達をたたいてしまったり、耳の聞こえに問題があるため（難聴と診断されたわけではない）、小太鼓を打つ音の加減が分からず、たたいているうちにどんどん強くなってしまったりするということがあった。

小太鼓に関して述べると、周りの音をよく聴かなければいけなかった経験が非常に少なかったことが推測される。障害をもつ子どもにとっては、生活経験の狭さから、音楽を聴くという経験が乏しいことは否めない。この女兒に限らず、本クラスの児童全員にも当てはまることである。音楽とは「大きな声で歌う。大きな音で演奏する。」と自分の中にインプットされているのかもしれない。自分が大きな音を立てていけば、周りの音が聞こえないのは当然で、手に入力するほど、テンポもどんどん速くなっていくのである。そこで、3学期には、音の「大きい・小さい」の学習に絞って授業を進めていった。LDを用いて、視覚的にも太鼓が大きくたたいているときと、小さくたたいているときの違いを学習した。

また、教師が極端に口を大きく開けたり、小さく開けたりして「大きな声・小さな声」を示した。すると、以前よりも伴奏の音を聴きながら、歌ったり、演奏したりすることができるようになった。そのことで、太鼓をたたくときにも、テンポや音の大きさに気をつけて最後まで演奏しようとする意識が出てきている。（実際の演奏はまだコントロールがきかないところもあるが）。

また、歌を歌うときには、大きな怒鳴り声のようなかんじだったのが、音程がついてきて、

自然な声で発声できるようになってきた。これからの授業は、子どもに合った的を絞った授業を行うことで、障害児だからできないで当たり前ではなく、できるようになった喜びというものを感じてもらいたいと思っている。そのためには、いい音楽をたくさん聴かせ、教師自身も音楽に対する知識・技能を深めていきたいと考えている。

<授業研究会をうけて>

この1年間の授業で、子どもたちが一番生き生きしながら取り組んでいたものは、「手話ソング」であった。みんなあつという間に振り付けを覚え、音楽が鳴り出すと自然に体が動くようになっていく。しかも、障害のため言葉があまり出ない子どもが、手話ソングになると、誰もこんなに大きな声を聴いたことがないというくらい大きな声を出して歌うのである。私は、改めて音楽の力の凄さに驚かされる思いである。幼稚園・小学校・中学校との連携となると、なかなか難しいものがあるが、この「手話ソング」なら一緒に発表したり、教え合うことが可能だろうと思う。「手話」といっても、本当の手話を使う必要はなく、自分たちが表現しやすいようにオリジナルの振り付けにしても構わないのである。1つの曲をいろいろな振り付けで踊って歌えたら、とても楽しいものになるように感じる。

最後に、「わくわくコンサート」で音楽の交流を図っているが、各学校の一部の児童・生徒しか集まらないのが残念なことである。ただ、4校全部での交流というのは難しいと思うので、まずは、交流をしている小学校と養護学校での全校交流の際に、音楽を通したふれ合いができていければと思っている。

(2) 附属幼稚園

保育指導案

平成16年12月10日（金）10:45～11:30

場所 附属幼稚園 ふじ組保育室

保育者 寺田 弥寿子

5歳児・ふじ組 男児16名 女児16名 計32名

I 本時の生活

1 ねらい

クラスの友達と一緒に歌を歌ったり話を聞き合ったりして、降園前のひと時を楽しむ。

2 生活の流れ

時刻	予想される子どもの姿	教師の援助
10:45	○トイレを済ませ、手洗い・うがいをする。	・トイレの使い方や、手洗い・うがいの様子を見守り、必要に応じて一人一人に指導を行う。
10:50	○降園前のひと時を過ごす。 ・「赤鼻のトナカイ」を手話を交えて歌う。	・教師自身が楽しむことにより、子どもの意欲を高め、楽しい雰囲気を作るようにする。 ・教師が歌いながらゆっくり行うことで、手の動かし方や歌詞を思い出しながら抵抗なく取り組めるようにする。 ・動きや歌を覚えている子どもを皆の前で認めることで自信を持たせると共に、他の子どもの手本となるようにする。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1日を振り返る。 ・ 先生の話聞く。 ・ 『エルマーとりゅう』を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しかったことや頑張ったことを数名の子どもに発表させることで、互いの今日の様子やさまざまな遊びについて気付けるようにしたい。 ・ 発表する場合の声の大きさや話し方について、必要に応じて考えさせたり助言したりする。 ・ 友達の話に熱心に聞いている様子の子どものことを認めることにより、人の話を聞くときの望ましい態度を知らせるようにする。
11:10	○降園準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入園選考による休園やクリスマス会について話し、20日の登園に期待を持たせるようにする。 ・ メリハリをつけたり挿絵を見せたりして読み聞かせを行い、子どもが物語の情景を思い浮かべやすくする。 ・ 持ち帰るものを子どもと共に確認し、忘れ物がないようにする。 ・ 手際よく準備ができるよう、支度を済ませる時間を決めておく。
11:30	○降園する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人と笑顔であいさつを交わし、保護者を確認して降園させる。

II 実践記録

1 保育を終えて

子どもは、歌うことや音楽に合わせて体を動かすことが大好きである。保育の中で歌ったり踊ったりすることで子どもの心は軽やかになり、明るい気分になったり友達と楽しさを共感したりできる。また、子どもの気持ちを落ち着かせたり、クラスの雰囲気を盛り上げたりするために、教師が計画的に、子どもが音楽と触れ合える環境を構成することも多い。

今回、音楽部会における初めての保育参観ということで、子どもが音楽を通して育つ姿を見ていただけるように、音楽を意図的に使用することの多い降園前のひとときの様子を参観していただいた。

<赤鼻のトナカイ>

クリスマスお楽しみ会で保護者が手話を交えて歌う曲である。会の中で子どもも一緒に歌って楽しめるよう、事前に保護者が教える時間をとった。7～8名の保護者が手話を交えて歌う様子を子どもたちは楽しそうに見入り、実際に歌う場面では、体を動かしてリズムをとりながら一生懸命に取り組む姿が見られた。手話ではあるが子どもにとっては踊りと代わらず、大変面白かったようである。一通り教えてもらった後、皆の前で発表したい子どもを募ったところ、希望者がクラスの半数以上であった。発表した子どもは満足感を、観客役の子どもは友達の姿を見る楽しさを味わったようである。

一日のほとんどを、好きな友達と自分の思いを実現しつつ自由に遊んで過ごす子どもたちである。降園前に皆で集まる時間に、クラス全員で音楽と触れ合いながら楽しく過ごすことも大切にしている。

<エルマーとりゅう>

低学年向けの読み物を、毎日少しずつ読み聞かせた。この時期は、5歳児の後半であり、子

どもの聞く力も育っているため、聞いた話から、自分なりにイメージを広げられるようになってきている。音楽ではないが、耳からの刺激だけで自分なりにイメージを広げ、自分なりに感じ取ることは、音楽を鑑賞することにも通じているように思う。

<手遊び>

子どもの集中力は長続きせず、一つの遊びや話が終わるとすぐ意識が途切れがちである。そのため幼稚園では、手遊びなどを利用して子どもの意識を集中させるようにしている。

今回は、「さかながはねて」と「ひげじいさん」の後半部分の手遊びを取り入れた。「赤鼻のトナカイ」を楽しんだ後、子どもたちは気分的に高揚していたが、手遊びを入れることで気持ちが落ち着き、次の読み聞かせへと静かに移ることができた。

2 今後の展望

降園前はもちろん、子どもの自由な遊びの中でも楽器遊びや踊り、劇場ごっこなど音楽に密接に関連した遊びが数多くある。幼稚園においては、それらの遊びの中で子どもに育てているもの、また、教師が育てたいと考えているものをしっかりと把握し、小学校以降の音楽科教育につながる部分を見出して援助を行うことが必要である。そのためにも、音楽科教育のカリキュラムの流れを理解し、幼稚園で経験させることが望ましい音楽遊びについて把握していきたいと考える。

(3) 附属小学校

音楽科学習案

平成16年2月22日(火) 13:25~14:30

場所 附属小学校 音楽室

指導者 森山 浩一

第4学年2組

- 1 題材 みんなで合わせて表現しよう
「パレードホッホー」, 「旧友」
- 2 自ら音楽のよさに気づき、表現に生かす学習の組織

題材の目標

- 音色の重なりのおもしろさに興味をもち、進んで表現しようとする。
- 重なり合う音の響きを感じ取ったり、曲想を生かした表現を工夫したりすることができる。
- 旋律のまとまりや特徴を生かして演奏することができる。
- 音の重なり合う響きや音色の美しさを味わって聴くことができる。

あこがれを抱く子どもの姿

鑑賞の活動を通して、曲の構成やバランスのとれた演奏のよさに気づき、自分の演奏に生かして表現することができる。

子どもの実態

- 合唱や重奏、合奏などの活動を通して友達と音を合わせることのおもしろさや難しさを
知り、協力して演奏をつくり上げようとしている。
- 曲想を考え、その気分を表すために楽器の音色を生かしたり、音の重なりや響きの美し
さへ目を向けたりすることで表現の工夫ができるようになってきている。
- 楽器本来の音色を出すための、正しい奏法を身に付けてきている。
- 鑑賞の活動で意見を述べ合うことを通して、響きのよさに耳を傾けたり、曲想を感じ取
ったりして、学習を進める習慣が身に付いてきているので、このことを生かして表現の
よさを探り、自らの表現を高める姿を期待したい。

教師のかかわり

本題材は、二つの異なるふしの重なりが特徴となっている表現曲と鑑賞曲で構成するも
のである。それぞれのパートの響き合いや、異なるふしの重なりのおもしろさ、美しさに
目を向け、自分たちでより良い表現に向かうことができるようにしたい。そのため、学習
の中に聴く活動が効果的に作用するよう配慮する。

- 表現に向かう際、歌詞や旋律の感じから曲の気分を感じ取り、バランスよい演奏をする
ことができるように、互いの演奏を聴き合ったり鑑賞学習材を聴いたりする活動を位置
付ける。
- 表現に向かう過程に、二つの旋律のからみ合う表現のよさをはじめ、演奏をまとめるど
きに必要となるフレーズ感、バランスなどのよさに気付き、自分たちの演奏に取り入れ、
生かすことができるような鑑賞曲を聴く場を位置付ける。

3 学習計画

○みんなで合わせて表現しよう

5時間（本時3／5）

子どもの取り組み	学習材と教師のかかわり	評価				時間
		関	工	技	鑑	
1-1 「パレードホッポー」 を歌詞唱したり、楽器で演奏 したりして曲の感じをつかむ。 ○曲の感じをつかみ、ふしの まとまりを感じて歌う。 ○アとイの旋律を合わせて歌 ったり演奏したりする。	○旋律のまとまりを感じ、リズムに乗っ て歌うようにする。 ○正しい音程で自然に重ねることができ るよう助言する。 ○互いの音を感じ取って合わせていくこ とができるよう言葉掛けをする。	○			○	1
2 いろいろな楽器の音色 ← の響き合いや二つの旋律の ← 重なり合いの美しさを味わ ← いながら「旧友」を聴く。 ○楽器の音色に目を向け、 ← 編成をイメージしながら	○楽器の音色に目を向けた感想を求 め、響きの豊かさを感じ取ること ができるようにする。				○	1 本

←	聴く。 ○二つの旋律の重なり合いに目を向けて聴く。	○異なる旋律が重なり合う際の表現法に気付くことができるような言葉掛けをする。				○	時
←	○表現のよさを発見しながら聴く。	○自分たちの表現を振り返りながら聴くように促す。				○	
1-2	より良い合わせ方を見つけながら、「パレードホッホー」を合唱する。 ○二つのふしの重なりと響き合いを感じながら合唱する。 ○演奏が曲をより良く表しているかどうか、互いに聴き合う。 ○発表会を行う。	○「旧友」の鑑賞で感じた印象を基に、新たな目当てと計画を立て、演奏に向かうようにする。 ○音の重なりによるバランスを中心に、自分たちで立てた目当てを視点として聴き合うことで、成果と課題を明らかにすることができるようにする。 ○互いのよさや伸びを認め合うよう促す。				○	
							○ 2
							○

4 本時の学習

(1) ねらい

二つのふしの重なる鑑賞曲を聴き比べる活動を通して、それぞれのふしを生かした表現のよさ（フレーズ感）や組み合わせた演奏のよさ（バランス感）を感じ取り、自分たちの表現曲の演奏をより良いものにしようとする思いをもつことができる。

(2) 展開

過程	子どもの取り組み	教師のかかわり	時間
表現に向かう	1 「パレードホッホー」を演奏し、前時までの成果と課題を確認した。	○最初に全員で斉唱し、前時までの成果を確認した。子供たちからは、次のような感想が出された。 ・だいたい音程は取れるようになった。 ・リズムによって歌うことができた。 次に、二つのふしを重ねて合唱をし、課題を確認した。 子供たちからは、次のような感想が出された。 ・そろっていない。 ・バランスが難しい。 そこで、課題としてあがった「二つのふしを重ねることの難しさ」を本時の目当てにつなげた。	10
鑑	2 「旧友」を聴き、感想を述べ合う。	○解決のヒントが隠されている鑑賞楽曲『旧友』を提示し、感想を求めた。子供が、曲の雰囲気や使われている楽器へ目を向けて、述べてきた意見を整理し、板書にまとめる。	

二つのふしのよりよい合わせ方を考えよう

	<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">木管楽器+金管楽器+打楽</div> = <div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px;">吹奏楽</div>
教材 1 楽器図	<p>吹奏楽の、多くの楽器による豊かな響きを感じ取ることができるようにしていく。</p> <p>その後、『旧友』には、「パレードホッホー」と同様に二つのふしがあり、重ねて演奏している部分があることに、楽譜を提示したり再度聴く場を設けたりして、気付くことができるようにする。</p>
教材 2 二つのふしの楽譜	<p>そこで子供に演奏の気付きを述べ合う場を設定し、きれいにそろっていることや両方の旋律がともに聞こえるバランスのよさに気付くようにする。</p>

○鑑賞曲を聴く活動を通して、ふしの特徴を生かしてバランスよく演奏することのよさに気付き、その後の自分たちの表現を高めようとする意欲をもつことができているかを、鑑賞後の話し合いの様子から観察する。《鑑賞～表現の工夫》

A：鑑賞曲から受けた印象を、自分たちの表現曲との共通点を関連付けて積極的に発言し、表現意欲を高めている。

B：二つのふしをバランスよく演奏することの大切さを再確認し、次時の表現に向けて意欲を高めている。

(鑑賞曲から表現のよさを十分に捉えることのできない子どもには、視点を明確に示すことで、今後の演奏の工夫の方向性をとらえることができるようにする。)

3 「パレードホッホー ○鑑賞楽曲を通して気づいたことを基に、自分たちで取り一」の演奏の工夫を考組んでいた表現曲「パレードホッホー」で試す活動を設定え、表現への思いをもする。ここでは、それぞれのふしに合った表現や、バランスを考えた重ね方を意識することができるようにする。

最後に、鑑賞活動を通して考えた表現にかかわる要素（バランス、フレーズ感）が音楽のよさの一つであることを確認し、次時への意欲を高め、本時のまとめとする。

(4) 附属中学校

中学校における実践「小学校の学習と関連した授業」

1 共同研究に当たって

本校の全体研究では、中学校の時期を中等教育前期、高等学校を中等教育後期としてとらえて、教科教育の在り方を探ることを研究内容のひとつとしている。4 附属校園の共同研究では、高等学校とは逆に下の年齢となる小学校や幼稚園との研究になるので、幅広い視点で音楽科教育を考える機会にしたいと考える。

本校音楽科では、本年度からの研究主題を「音楽的な感受を深める授業の創造」とし、研究

を進めている。「音楽的な感受」は、音楽科の基礎・基本の大きな柱であり、全ての音楽活動の基盤となる。そしてその感受の深さがその後の表現活動や鑑賞活動の多様さにつながるものであることから本主題を設定した。また、音楽的な要素を的確に聴き取りその後の活動につなぐため、比較聴取の活動を各題材で効果的に設定し、音楽の諸要素に基づいて聴く意識を高め、「音楽的な感受」の基盤となる「聴く力」を伸ばしたいと考え、研究副主題は「比較聴取を生かした指導の工夫」としている。4 附属校園の共同研究では鑑賞を中心として実践を通じた研究を進めたいと考える。

2 本年度の実践

研究の初年度は、小学校で学んだことの定着度及び中学校での学習でどれだけ発展することができるのかを探ることから始めるため、小学校の学習と関連の深い題材で授業を実践することとした。題材については、年齢の近い第1学年の題材で、中学校に入学して以来まだ学習していない内容の題材が適していると考え、小学校と中学校の教科書を検討した結果、日本の伝統音楽の題材を選択した。雅楽「越天楽」は両方の教科書に掲載されており、中学1年生へのアンケートでも「越天楽今様」をほとんどの生徒が知っていたからである。

次ページの指導案により実践したが、日本の伝統音楽としてのレディネスは、予想より少なく、雅楽についても知識面で新しく知ることが多かったようである。しかし細かな音や楽曲の微妙な変化を感じ取ることは小学校での学習が基盤となっており、今後は中学生らしい語彙を用いた表現や鑑賞の視点を探りたいと考える。

【生徒のノートの記述例】

音楽科学習指導案

平成16年2月22日（火）15：10～16：00

第1学年1組 男子19名 女子23名

第411番教室（音楽室）

指導者 福井 千代

- ・学部と4 附属学校園共同研究授業
- ・附属中学校教科内研究授業

1 題材名 日本伝統的な音楽を知ろう

2 題材の目標

- 日本の伝統音楽に興味・関心を持ち、それらを大切に伝承しようとする。
- 日本の伝統音楽の特徴や楽器の音色の特徴を聴き取ることができる。

3 題材の授業計画（全7時間） ※〔小〕は小学校の学習と関わると思われる内容

時	主 題	主 な 学 習 活 動
3	西洋と日本の音階	<ul style="list-style-type: none"> ・音名、階名（固定ド唱法と移動ド唱法）の理解 〔小〕 ・既習曲の階名唱（移動ド唱法） ・西洋の長音階と短音階の理解及び調の理解 〔小〕 ・日本の民謡の歌唱と日本の音階（5音音階）の理解 ・日本の伝統的な音楽に関するアンケート 〔小〕
2	世界に誇る日本の伝統的な	<ul style="list-style-type: none"> ・雅楽や雅楽の楽器の演奏の特徴の聴取 ・雅楽「越天楽」の視聴

2	日本の楽器にふれよう	<ul style="list-style-type: none"> ・箏曲「六段」の鑑賞 ・箏の演奏や音色の特徴の聴取 ・箏, 尺八, 箏篋の実演 	[小] [小]

4 本時の主題 世界に誇る日本の伝統的な音楽「雅楽」 — 雅楽入門 —

5 授業の視点

本時は、雅楽の学習を通して、日本の伝統的な音楽に親しもうとする題材の第1時である。「世界に誇る日本の伝統的な音楽」をキーワードとして雅楽の歴史的価値から学習を始め、楽曲の雰囲気や楽器の音色や表現の特徴を感じ取るという、鑑賞の学習として基本的な内容で学習を進める。事前のアンケートには、日本の伝統的な音楽に対して「ゆっくりしている」「静かな曲が多い」「むずかしい」などという固定したイメージを持ち、楽曲や楽器に関する知識や音楽体験が少ない生徒が多いことが伺える。そのような生徒の実態を踏まえ、「雅楽のよさを世界の人々に伝える」という具体的な課題を掲げて学習を進めることとした。

指導は楽曲を聴いた第1印象を答える学習から始める。多くの生徒に発言させ、伝統的な音楽が「難しい」という感覚を払拭させ、じっくりと特徴を聴き取る次時の学習への足がかりとしたい。次に比較的容易な演奏楽器を聴き取る学習に進み、次第に雅楽への興味・関心を高めたいと考える。伝統的な音楽の学習では、聴覚教材だけでなく映像資料が大変効果的である。本時の最後の鑑賞活動では、楽器の演奏の様子を確かめさせるとともに、平安時代の優雅な気分を味わわせ、伝統的な文化への興味・関心を高めたい。

小学校の教科書には歌唱教材「越天楽今様」が掲載されており、関連教材として「越天楽」を鑑賞する学習が小学校でも展開されることが予想される。小学校での学習の実態を把握し学習内容の関連や中学校での発展を図ることができるよう、今後研究を進めたい題材である。

6 本時の目標

- 雅楽の楽器について理解を深め、雅楽に興味・関心を持つ。

目 標 の 観 点 別 分 析			
音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能	鑑賞の能力
ア 意識を集中して、音楽を視聴しようとする。	R 楽曲を聴いて、日本の伝統的な楽曲の気分を感じ取ることができる。		エ 雅楽の曲の気分や演
イ			

ウ
楽器の音色や形や奏法
に興味・関心を持つ。

オ
楽曲を聴いて、雅楽
の楽器の音色や表現
の特徴を聴き取るこ
とができる。

7 本時の展開

目標	生徒の活動	教師の手だて・評価
	1 これまでの学習を振り返る。	1 アンケートの結果を課題と結びつける。
	雅 楽 「 越 天 楽 」 の 演 奏 の 印 象 を ま と め よ う	
R ア イ エ	2 雅楽「越天楽」の冒頭部分を聴き、以下の視点で意見交換を行う。 ・旋律やリズムの特徴とその変化 ・音楽の響きや気分等	2 多くの生徒に発言させて意見をまとめるとともに、次時に深める課題を導き出す。 評価 ・積極的に気づいたことや意見を発表し、ノートにまとめているか。 〈意見発表、ノート〉
	雅 楽 の 楽 器 を 知 ろ う	
ア オ	3 雅楽「越天楽」の冒頭部分を聴き、どんな楽器で演奏されているのかを聴き取る。	3 管楽器、弦楽器、打楽器が揃っていることを前提に「それぞれ何種類の楽器が演奏しているか」を最初の課題とする。 名前が分からない楽器は、擬声語で答えさせる。
ウ	4 教科書の資料を参考にして、それぞれの楽器の音色と名前を確認する。 〔管楽器〕・龍笛 ・笙 ・箏 〔弦楽器〕・楽箏 ・楽琵琶 〔打楽器〕・楽太鼓 ・鉦鼓 ・鞆鼓	4 評価 ・楽器の音色の違いを聴き取ることができたか。 〈観察、意見発表〉 聴き取れない生徒には、打楽器から聴き取らせる。
ア エ オ	5 雅楽「越天楽」の前半部分を視聴する。	4 楽器の名前だけでなく、音色の特徴を自分の言葉で教科書やノートにまとめるよう促す。

4 研究結果とその考察

従来はそれぞれの考え方に基づいて実践してきた音楽科の授業研究を、4校種共通の視点で取り組むことで、研究一年目にしては大きな成果が得られたと考えられる。「聴くこと」にテーマを絞り、児童生徒の能力や発達の実態、活動の状況、教材のあり方、授業や活動の目標などのさまざまな要素について研究を進めてきた一年間の研究成果を整理すると、次のようになる。

(1) 聴くことの大切さ

歌ったり楽器を演奏したりという表現の活動が主である音楽科の授業ではあるが、聴く活動が重要な役割を果たしており、そのことについては本年度の附属小学校の研究でも取り上げている。授業の場面では、範唱や範奏を聴く、課題を発見したり活動を深めるために準備された資料を聴く、友だちの演奏を聴く、本物を聴くなどのさまざまな聴く活動が行われる。その活動を通して、音楽の「よさ」を理解すること、すなわち、美的な価値判断をすることは、最終的には高度な価値感情である情操を育てることになると考えられる。

児童生徒の表現力を向上させるには、表現のための技能の獲得とともに、「よさ」を理解できる感受の能力の伸長が必要であること、感受の能力によって音楽の質の向上が期待できることが研究を通して再認識された。

(2) 児童生徒の感受の実態とその表出

校種が異なりさまざまな発達段階にある児童生徒の音楽に対する反応は多彩である。

音楽に対して身体で素直に反応できるのは、小学校低学年までの児童であり、その時期を過ぎると、心理的な影響から身体による反応が見られなくなることが知られている。そのかわりに言語によるコミュニケーションの能力が育つことで、会話を主とした学習が成立するようになり、学習の様相が一変する。

ところで、授業での観察の結果から、いずれの段階においても児童生徒は音楽を十分に感受していると考えられる姿が見られ、年齢によって大きな差がある表現の技能などに比べると、音楽的な感受の実態は年齢による差が大きくないように見受けられた。

身体による反応は、その性格上、それに適したものとそうでないものがあることも事実で、主な活動対象はリズムやテンポ、強弱などの要素であることがわかった。

(3) 身体による反応と言語によるコミュニケーション

以上のような年齢による2つの様相をもつ音楽科の学習活動において、幼稚園児から中学生までの音楽的な成長の過程を考察すると、身体による反応を主とする学習から言語によるコミュニケーションを主とする学習への移行をいかに違和感なくスムーズに行うかが教科指導における一つの課題であることが明らかになった。

それとともに、言語によるコミュニケーションには、語彙の獲得が重要であり、それは音楽の授業を通して達成しなくてはならない大切な内容であることが再認識された。音楽から感受した内容を表出しようとする児童生徒の欲求を満足させるには、このことが必要であり、それによって音楽の学習が成立するからである。

児童生徒を主体とし、自主的な活動が強調される近年の学校教育では、知識が蔑ろにされ、

それは音楽科でも同様の傾向が見られる。そのため義務教育9年間の授業を受けても楽譜が読めない、楽器の名前も知らないといった実態があり、それでは世間に対して音楽科の存在意義が疑われても仕方がないといった実状である。このような事態に対処するには、どの時期にどれだけの音楽に関する知識を獲得させるか、どのようにして音楽科の学力を蓄積するかなどについて構想し長期にわたる音楽科カリキュラムを作成することが緊急の課題であることが再認識された。

(4) 目標の焦点化の大切さ

さまざまな発達段階と能力の児童生徒を対象とした授業研究を通して、音楽学習では目標を焦点化することによって指導効果が高まることが明らかになった。聴く活動についても、漠然と聴くのではなく、リズムにねらいを定めることで児童に変化が見られたという事例が養護学校の実践として報告された。

児童生徒の実態を把握し、教材となる楽曲の研究を深め、指導目標を焦点化して指導にあたるという、教師の指導力と役割の重要性が再認識された。

以上の研究成果をふまえ、次年度以降もテーマを設定し研究を深めることで、将来的には、養護学校を含む幼稚園から中学校までの一貫した音楽科カリキュラムを構築することに本共同研究の目的があると考えられる。